

2.19
男子シングル
凜風館で
大応援



カナダ・バンクーバーの五輪フィギュアスケート会場「パシフィック・コロシウム」と、関大千里山キャンパス「凜風館」1階の学生ラウンジで喜びの共振が起きた。

2月19日、男子シングルのフリー演技。午後2時(バンクーバー 18日午後9時)前後に応援のボルテージは最高潮に達した。高橋大輔(大学院文学研究科M2年)、織田信成(文学部4年)の両選手が日本代表として戦い、高橋選手が日本男子初となる銅メダル獲得、織田選手は7位入賞を果たす熱い一日となった。

凜風館の応援会に集まった在学生、教職員、校友、地域の人たちは約

700人。競技が大型ビジョンに映し出される。固唾を飲み、大きな拍手を送るという2つの波が繰り返してやってくる。そして2人の快挙に沸いた。

バンクーバーに乗り込んだ楠見晴重学長率いる応援団、上原洋允理事長が最前列に陣取った千里山の応援団はともに感激に浸り、学生たちは関大の仲間として両選手にお祝いの言葉を送った。



町田樹 (文2 アイススケート部)
まず2人にお疲れ様と言いたいです。織田選手は靴紐が切れるアクシデントもありましたが、諦めずに演技をやり通したことに敬服しました。高橋選手は男子フィギュア史上初のメダル獲得で本当にすごいと思います。自分も高橋先輩、織田先輩に続いていかなければいけないと思っていますので、頑張っていきたいです。



澤田亜紀 (文3 アイススケート部副主将)
試合でも見る事の出来る試合をこうして関大に集まってみんなで応援できることは本当に凄いことだと思います。高橋選手が銅メダルを取ったときには思わずもらい泣きしそうになりました。両選手とも相当なプレッシャーを背負っての演技だったと思いますが、自分の納得のいく演技をすることが出来たのは良かったと思います。



熱い声援を送る応援団、チアリーダー

上田万喜(社1)
2人とも失敗する場面はあったが、苦しい練習をしてきたからこそ、その後素晴らしい結果を出せたのだと思います。感動しました！

田村菜(社1)
オリンピックという大舞台で自分のやりたいことを買った2人を尊敬します。高橋選手、織田選手、お疲れ様でした。

福永偏大(シス2)
2人ともメダルを獲得できると思っていたので、感動しました。織田選手はアクシデントにあいながらも最後まで演技を続けたことに感動しました。

藤川美寿々(社1)
周りの人々と応援を通して、体になることが出来ました。高橋選手は男子フィギュア初のメダル獲得おめでとう！！

西上順三(総3)アイススケート部
同じアイススケート部として応援できました。高橋選手の輝きも嬉しかったです。織田選手も最後までよく頑張っていました。帰ってきてお疲れ様です！！

堀尾悠(外)
アクシデントはいくつかありましたが、最後までやりきろうという姿勢で健闘して、メダル獲得できて感動しました。

尾崎陽子(政策2)
高橋選手は銅メダル獲得おめでとうございました。高橋選手、織田選手のような世界で活躍している先輩が関大にいらっしゃることが誇りに思います。

川西実佐子(社2)
高橋選手、織田選手の演技を見て、自分の意を最後まで貫く姿勢を忘れてはならないというのを改めて思い出させてくれました。2人が自分の先輩で誇りに思います。これからの活躍も期待しています！！

小野澤福海(情2)
応援が非常に盛り上がり、楽しかったです。高難度の技に挑戦する高橋選手の姿に、瞬心を奪われました。織田選手の演技も見ていてすごく感動しました。

名賀千尋(文1)
両選手とも、少しヒヤッとすることがあったのに、動じず最後まで演技されたので、すごいなあと感じました。

東谷陽聖(法1)
高橋選手からは目の丸のためだけに、オリンピックは選手達のための祭典であるという姿勢に心をうたれました。また、織田選手からは、アタリに負けない精神力の強さを感じることができました。

松田優一(文4)
失敗を恐れず自分の信念を買った高橋選手、織田選手の強い精神力に感動しました。織田選手には次のソチオリンピックで雪辱を果たして欲しいと思います！！

新井田那奈(社2)
高橋選手、織田選手の両選手を関大生が一体となって応援することが出来たのは、関大の温かさを感ぜました。素敵な場に参加することができて幸せでした。

高木貴志(総1)
織田選手も高橋選手も、選手もい演技ができたと思います。織田選手は靴紐が切れるアクシデントがありましたが、自分らしい演技が出来て良かったです。

仲村知也(文1)応援団
高橋選手の銅メダルはすごいと思います。織田選手は最後まで関大魂を見せてくれました。自分たちも応援で関大魂を見せました。

藤原志緒(社2)
応援会場に予想以上の人がいてびっくりしました。織田選手はまさか事態に見舞われたけど、高橋選手はその分まで頑張ったので、とても嬉しかったです。

高橋選手、織田選手
関大生が世界3位というところまで、高橋選手も織田選手も、諦めずに最後まで滑ってくれました。一杯応援できて良かったです。高橋選手、織田選手はお疲れ様でした。ありがとうございます。

船野里菜(社2)バトンチアリーダー部
高橋選手銅メダルおめでとう。次ももっともっとと、上を目指して頑張ってください。みんなでオリンピックの応援できて、一生の思い出になりました。

早勢浩希(法1)
メダルをとれて、ホットしました。4回転が成功していたら、絶対金メダルでした。高橋選手、織田選手、本当にお疲れ様です。

(※敬称略、順不同)



最後まで見守り続けたピア・サポータ



寄せ書きに込められた250の熱いメッセージ

関大生が一斉にペンを動かした。バンクーバーオリンピック出場のためカナダ入りしている高橋大輔選手、織田信成選手のために。

2人を応援する思いを寄せ書きにしようと、ピア・コミュニティの呼びかけで学生たちが集まった。千里山キャンパスの凧風館で2月8日11時にスタート。タテ90センチ、ヨコ1メートル50センチの台紙は中央にカイザースのロゴと「ガンバレ高橋」「ガンバレ織田」の文字が躍っていた。テーブルに広げられた高橋選手用2枚、織田選手用2枚の台紙に腕をいっぱい伸ばして書き出した。ピア・サポーターたちに応援団リーダー部、バトン・チアリーダー部員らも加わった50人。関大カラーの紫紺、金メダルをイメージした黄色、熱い気持ちを込めた赤など色が弾んだ。30分もたたないうちに台紙の白い部分は埋め尽くされた。合計4枚に約250のメッセージがあった。この模様が新聞やテレビでも伝えられ、サポーターたちはテレビカメラを通じて両選手に声援を送った。

寄せ書きの2人分1セットはバンクーバーへ、そしてもう1セットは19日に凧

風館で行われたフリー演技の応援会に持ち込んだ。

応援の寄せ書きは、これまでに他競技でも届けられた。大学No.1になったアメリカンフットボール部が出場した1月3日のライスボウル(社会人王者の鹿島との日本一決定戦)。会場が東京ドームのため、応援に行くことができなかった学生が多数いた。そこで数枚の旗に寄せ書きをした。力を出し切ってほしいと思いを込めて。

今回のオリンピック会場はバンクーバー。高橋選手、織田選手が出場するフィギュアスケート男子シングルは氷の上では1人。同じ関大生として現地で声援を送れないのは悔しい。せめて声援を文字にして寄せ書きにしたい、バンクーバーのリンクに関大の空気を送りたい。そう企画したピア・コミュニティ運営本部の松田優一本部長(文4)は「この時期は春休みだけに、人が集まるかどうか心配でした」と本音で振り返る。しかし、始まる瞬間に台紙の空白は色鮮やかな文字で埋まった。応援する気持ちがひとつになり、学生と学生の間につながりが生まれて、広がりを見せた。

松田本部長にも笑顔がこぼれていた。あの寄せ書きで、バンクーバーの2人に氷も溶かすほど熱い関大生の思いを送れたからだった。



甲子園ボウルで大応援!



甲子園球場でピア・サポーターが「関大生のつながり」が広がっていると実感したのは

昨年12月13日、アメリカンフットボール全日本大学選手権の第64回甲子園ボウルだった。

今季のアメリカンフットボール部は関西学生リーグ前半に京大、関学、立命を倒す快進撃で大きな話題となり、61年ぶりにリーグ優勝、さらに甲子園ボウルへ駒を進めた。この快挙に、ピア・コミュニティ運営本部とピア・スポーツコミュニティは応援ツアーを共催した。応援ツアーにはピア・サポーター20人を含む150人が参加。ツアー開催に向けて、参加者を募るピラ配りは、アメリカンフットボール部員とピア・サポーターが千里山キャンパスで精力的に行った。

2万5000人が詰めかけた中での熱戦で法大を50-38で破り、大学日本一まで駆け上がったアメリカンフットボール部。参加者は惜しめない拍手を送ったが、一方で法大の戦いぶりも大いに称えた。法大は学生支援GP連続シンポジウム「ピア・サポートの取り組みと新たな課題」を共催したピア・サポート仲間。甲子園ボウルの前には両大学の学生支援GP関係者が連絡を取り合うなど、より関係を深めている。

つながりは、広がって強くなる。アメリカンフットボール部の大館賢二郎主将(電4)も「強くなるためにはコミュニケーションは必要なことだと考えています」と言う。今回の応援ツアーを通じて学生が多方面と連絡を密にできたことは、より大きなピア・サポートへの一歩となった。

関大サッカー部と地雷除去運動の関大生がつながった

地雷除去活動に寄付をする関大生と、全国トップクラスの力と品格をつけてきたサッカー部の選手たちがつながった。

嶋谷梨沙さん(法4)は、タイ・カンボジアの地雷除去に一役買おうとする団体の代表だ。1月30日に、吹田市内でフットサル大会「第2回KICK THE MINE CUP in 関西」を開催し、サッカー部員の有志がチームをつくってこれに参加した。チャリティーがキーワードとなって、手を取り合う格好になった。

嶋谷さんがチャリティーイベントを始めることになったきっかけは、カナダ留学中に参加したチャリティーマラソン。ここでの「スポーツを楽しむことを通して誰かの助けになった」経験がさらに心を動かした。帰国してから地雷除去のための活動を始めたが「大会をやりたい気持ちは強かったものの関西では初めての試みということもあって、できるか不安もあった」という状況だった。

今回の大会に、サッカー部員で構成したチームがK U F Cの名で参加した。以前からスポーツを通して世界の助けになるような活動に興味を持つ部員がいたこと。また、新たにフットサルのチームをつくる



と考えていたこと。そういう経緯があって、嶋谷さんが催す大会を知り、早速出場することを決めた。18チームが参加した大会で、最終結果は準優勝。K U F Cは、楽しく活気のある試合内容で周囲にチームの心意気を示した。

大会参加へ積極的に動いたサッカー部員の保手濱直樹さん(政策3)は「ボールひとつで遊べるサッカーを楽しみながら、人と人のコミュニケーションを広げることやつながりをつくることを考えていました。次は自分たちが主体となって、この大会のような、スポーツを通して誰かの助けになる活動をしてみたい」と、さらに前向きだ。

嶋谷さんらの仲間(ピア)と、保手濱さんらの仲間(ピア)は共通の思いでつながった。こういうつながりがキャンパスのあちらこちらへ広がりそうな気配がしてきている。

